

クラウド・シティ（仮）

午後の日差しが巨大な平野の一区画に降り注いでいる。街に緑はない。代わりに超高層ビルが埋め込んである。モノレールのレールが街を横断している。駅は超高層ビルとを繋ぐ橋として建造物と一体になっている。モノレールが駅に到着した。けたたましい音を立てて案内が流れ、プラットフォームの屋根から、透明な液晶の案内板がぶら下がっている。停止したモノレールの扉が開く。人々が降りていく。先鋭の都市は魅力に溢れ、若者に希望を与え、壮年の者には労働の喜びを、老年の者には安泰と永遠の安息を与える。国家のカセを外れた企業が作り出した、機械制御のユートピアは群衆を魅了する『クラウド・シティ』と呼んだ。モノレールを降りた若者の一人にナイアスがいた。ナイアスはプラットフォームには透明な液晶に次々浮かぶ案内を見て、驚いた。住んでいる街の駅は殺伐としていて、過剰とも言える情報は流れてこない。モノレールを降りた人々は皆、規則正しく駅から動いている。ナイアスも降りた人々に紛れてプラットフォームから出口に向かった。駅の改札は何もかざさずに通過できた。体を読み取り、体型や心拍数を含めた身体データから情報を読み取り、的確に手持ちではない電子マネーから精算していく。ミスは一度もなく、立ち止まらずに通過するシステムだ。代わりに出入り口は別になっている。行き交っている状態では方向が混ざって立ち止まってしまうからだ。ナイアスは駅前の広場に出た。広場や草や木は一切ない。代わりにモノリスに似た案内板が並べてある。バス停には排気ガスを一切出さないバスが停止している。ナイアスは案内板に近づいた。『端末をご提示ください』音声が入った。ナイアスはカードを懐から取り出し、案内板にかざした。案内板の色が瞬時に変化する。『ガイドを配布致しました。端末にてデータを確認下さい』無機質な音声と共に『Copy OK!』と、文字が飛び跳ねるアニメーションが映った。ナイアスはカードに目をやった。半透明のカードにメニューが映っている。カードを操作しながら、先を見渡した。無数のビルが威圧的に立ち並んでいて、ビルの上に敷いてあるレールの上には小型車の輸送列車が走っている。露天の類いはなく、店はビルに入っている。ビルのガラスには動画の広告が流れている。ビル間の荷物の輸送は専用の列車が担当する。完璧なまでに計算した都市設計に感心した。田舎で過ごしてきた若者には別世界の光景に見える。ナイアスは指先でカードをいじった。目的地を入力すると案内が一瞬で現れた。「歩いていく方が遠回りかもな」カードが表示している案内通りに歩き出した。若者がクラウド・シティに来たのは憧れや移住でも、観光でもない。頼みを受けてきただけだ。

一ヶ月前、アルフと称する知人の男は突然ナイアスを呼び出した。他人の都合を一切無視するばかりか、無茶な用件を突きつけるので気分が乗らない。かと言って断れば過剰なメールと電話で責め立て、機械工学者の立場を使って混乱を引き起こす。権威を嫌って引きこもる人間に限って、尊大な態度を取るから困る。ナイアスはタクシーを使い、アルフの家の前に到着した。領収書を受け取り、降りた。家は豪邸と言える程大きくないが、裕福な人間の住居だと分かる程度の作り込んでいる。ナイアスがインターホンを押すと、人間のメイドが来て書斎に案内した。今時、人間のメイドを雇うのは珍しい。書斎には機械工学や哲学を中心とした、気難しい本や何に使うのか分からない機械端末が置いてある。レトロな板状の端末から、キーボードを含めた入力装置と一体になった機械まである。博物館の一室に近い。窓際には水槽があり、水草の間を魚が泳いでいるが、実際には水槽内に立体映像が浮かんでいるに過ぎない。アルフは不抜けた表情で、椅子に座って待っていた。「ナイアス様が来ました」少年のメイドがドアを開けた。ナイアスが入ってきた。「失礼します」少年のメイドに目をやった。メイドと言えば中年か老年の女性が就くのだと認識していたが、少年が就くのは珍しい。メイドはナイアスと目が合った。軽く頭を下げた。ナイアスはアルフの元に向かった。「失礼します」メイドはドアを閉めた。ナイアスは机に目をやった。両親と少年の写真が置いてある。ホログラムで保存する時代に、アナログな写真を保管し、飾っておくのは珍しい。「かしこまらなくても良い」アルフは椅子を回してナイアスの方を向いた。「用件と言っても大した話ではない。俺の代わりにクラウド・シティに行ってデータを回収してくれ」「データをですか。今はネットワークを使えば簡単に出来ますよ。セキュリティも量子キーですから以前に比べて安全です」アルフは端末を操作する。机の上に特定した人物が持っているボックスのデータが現れた。ボックスに映っている男のデータは、アルフよりも10歳程若い。「お前の親父さんからの要請だよ。詳細は知らないが、俺に見てくれて連絡が来た。学会や研究所を通さず名指しでだ。何のデータだか聞き返しているが、未だに返答がない。当然、俺と共有しているオンラインストレージにも関連するデータはない」端末を操作し、メールを含めた通信ソフトを次々と起動する。アクセスの結果は皆ブアだ。「手渡しで受け取ってこいって意味ですか。自分で行けばいいじゃないですか」ナイアスはアルフに声をかけた。アルフはナイアスをにらんだ。ナイアスは引き下がった。「俺も歳だからな。ロボットと消毒液に塗れた街に行く気力はない。人と自然のない街に何の魅力がある。健康を害して早死するだけだ」「ロボットって古いですよ。チャイルド・キットと言うんです」ナイアスはアルフに突っかった。チャイルド・キットとは一般社会に浸透したロボットの中で、子供でも扱えるキットをコンセプトとして開発した人型ロボットの商品名を指す。扱いやすさを売りにして浸透したため、ロボットの代名詞になった。現在ではロボットと呼ぶ者はほとんどいない。当初は人間の姿を模したアンドロイドだったが、人に近づけると区別がつかなくなるので、現在はあえて人からかけ離れたボディで構成している。人間と同じ姿をしている型は流通していない。博物館にミイラと同じ感覚で展示している以外に、一般人の目に入る機会はない。「呼び名が何でも意味は同じだ」アルフは強い口調で言い、端末を操作した。「子供でも従順で、無茶な命令でも聞いてくれる。誰も傷つきはしなかったが、生きがいは奪った」「労働ですか」アルフはうなづいた。ロボットが普及すれば人から労働が消えていく。ロボットが存在しない時代から提唱していた問題だ。かたや単純かつ、危険な労働をロボットが肩代わりし、整備や組み立てを始めとする複雑な作業へ転換していくと答えた識者もいた。実際に普及してみるとロボットは正確さと論理性を武器に高度かつ、生産性のある仕事を請け負った。人は逆に単純労働をする地位に向かった。単純労働ほど不確定な要素が多く、ロボットでは未知の状況に対処できないからだ。「本来、人が安全を得るためのロボットだったが今では危険に駆り立てる。ロボットは人を支配し

たんだ。信用できるもクソもない」机においてあるカードを手に取り、ナイアスに投げた。

ナイアスはカードを受け取り、眺めた。半透明でデータのサムネイルが浮かんでいる。

「ロボットとお前の持っているカード、違いは分かるか」

「いえ、わかりません」

「人が便利に生活できるツールだよ。道具と割り切れれば安全だが、過剰に辛抱すれば損害を与える。お前の親父はロボットの用途拡大を推奨していたが、拡大すれば人の仕事だけではない。人を惑わし食ってしまうよ。昔あったら、ロボットが人を絶滅に追いやる話が」

ナイアスはアルフの言葉に眉をひそめた。父はチャイルド・キットのソフトウェア部分の研究をしていて、現在は最前線のクラウド・シティにこもっている。家に戻っていないが、ホログラムによる立体映像の通信で連絡をとっているのが寂しさはない。

「話がそれだな」アルフは端末を操作した。机に浮かぶ立体映像が切り替わり、データが多重に映る。

ナイアスはデータを確認した。チャイルド・キットの学習機能と法規に関する内容だ。

「俺を名指しして、データを取ってこいって言うてきた。膨大な学習機能が法に触れているかの確認と見ていい」

「法に触れるって、何がですか」

「分からんよ。法に触れかねんほど、危険なのを除いてな」アルフは笑みを浮かべた。「ナイアス、お前は今夏休みで暇人こいているんだろ、社会勉強ついでに行ってこい。金はカードにぶち込んでやる。親父には連絡しといてやるから、すぐに行って来い」

「本当に大丈夫なんですかね」

「仕事をする時の鉄則だ、依頼する人間と関わる人間は信用しろ」アルフはドアの方を向いた。「クライス」

ドアが開き、メイドが現れた。「旦那様、御用ですか」

「ナイアスを送り届けろ、外には出るなよ」

「かしこまりました」メイドは頭を下げた。

ナイアスはメイドと共に部屋を出た。一昔前までは家事を担当するメイドを雇うのは当然の社会だった。雇う側は面倒な家事に携わずともよく、請け負う側は家でしているのと同じ作業をするだけで銭を得る。立派な労働関係が成立していた。今やチャイルド・キットに代わり、メイドの需要は皆無になった。一時期はメイド達が反発してデモ行進をするのがおなじみの光景だったが、時代の波には勝てず淘汰していった。メイドを雇っているのは懐古主義の人間か、チャイルド・キットを嫌う人間位しかいない。

メイドの案内で外に出た。メイドはアルフの指示に従い、外に出ずにドアを閉めた。

家に戻ると母親に内容を話した。父親にも通信をしたが、他愛ない雑談で話を回避してきた。本題に入らないまま勝手に通信を切った。

母親は余りに不可解な態度に不審を覚えた。浮気をしているのではないかと冗談めいた口調で言った。

父親は研究に没頭する余りに周りに見えない人間なのは、ナイアスが幼い頃から知っていた。旅行にも付き合わず、人との交流も避けていた。時に謎めいた理論を独り言で吐いていた。父の研究はチャイルド・キットに関する内容だと知ったのは最近だ。何を研究しているか、詳細を知る切っ掛けになる。部屋に戻り、ベッドに横たわるとカードを眺めた。何も映っていない。

ナイアスは笑みを浮かべ、カードを枕元において眠りについた。

ナイアスがクラウド・シティに到着してからは、休憩と無縁で道案内のままに進んでいる。休むにしても店に入って良いのか分からない。田舎の人間にとって、最新鋭の設備が整った店に入るのは勇気が必要だ。

同じ構成の超高層ビルが視界を遮っていて、平坦な土地ながら迷いを引き出す要因になっている。

都市設計者も迷いやすさを想定していたのか、至る場所にモノリスが設置してある。端末の案内だけでは足りないのだ。

大通りの先に、更なる密度で高層ビル群が固まっているエリアがあった。前にはゲートとモノリスが設置してある。

ナイアスはゲートの先に見える道路や建物を眺めている。先に父親がいるのを知っているが、先へ進んで良いのか悩んだ。ゲートは無人で、管理している人間は誰もいないのだ。

ゲートを車が通過していく。自動でゲートが開き、先へと向かっていく。

ナイアスは意を決して、ゲートに近づいた。

看板にも『即射殺する』旨の記述がある看板はないので誤って入っても問題ないと判断した。

ゲートに近づいた途端、耳をつんざく電子音がゲートから響く。

車輪のついた警備ロボットが一斉にナイアスの周りに集まりだした。アームからスタンガンが見える。

ナイアスはロボットの集団を前に動きを止める。近づいただけで犯罪者になるのか。頭の中で必死に言い訳を探していた。

まもなくパトロールカーが近づいてきた。後部に荷台を乗せた印象がある。道路の脇に止まり、警察官のヨシユアが降りてきた。パトロールカーの後部に付いている荷台が展開し、円筒形のロボットが転がり落ちてくる。

『通報により対象を確認します』ロボットは警備ロボットの情報とリンクし、ナイアスを識別した。『対象を確認しました。反抗は見せていません』

後部座席が展開し、白と黒を基調とした警察のカラーリングをした、チャイルド・キットが降りてくる。

「締め上げるなよ、近づいていい」ヨシユアはチャイルド・キットの方を向いた。

「対象の確保はしなくても良いと」

「犯罪者ではない、自動で連絡が入っただけだ」ヨシユアは警備ロボットをかき分けてナイアスの前に来た。「君、何をしている」

ヨシユアの脇に警察のチャイルド・キットが歩いてきた。『警察です』目の前に警察の身分と所属がホログラムで映る。

ナイアスは安心した。機械ではなく人間が来てくれたからだ。「すみません、父の元に行きたいのですがルートがわからないのです」

「父だと」

ナイアスはカードを取り出し、操作した。地図と、父親であるトーマスの身分証明がホログラムで映る。

「関係者か」

「叔父が根回しをしてくれていると言っていました。通過できるか分からないのですが、アポイントを取っていないならやり方を教えて下さい」

ヨシユアは顔をしかめた。「君は中に入りたいと」

「はい」

ヨシユアは胸ポケットから半透明のカードを取り出し、操作する。データが多重に浮かび上がる。「データは」

ナイアスはカードを押し、プログラムを閉じ、ヨシュアに差し出した。
ヨシュアはカードを受け取り、重ねた。互いのカードが鈍く光り、データがリンクした。
『身分は判明しています。連行しますか？』
「何もしていない人間を連行すれば俺は逮捕監禁罪でバグと給料がなくなって、お前はスクラップになる。いいのか？」
『私の知る範囲ではありません』
「チャイルド・キットに話は通じんか」ヨシュアはぼやき、ナイアスにカードを返した。ナイアスはカードを受け取った。
ヨシュアはカードを操作した。連絡中のアイコンがプログラムとして浮かび上がる。
暫くして回線が繋がった。トーマスの顔が現れる。
『警察か、郵便のセールスじゃないんだから、毎日尋ねなくても仕事しとると伝えてやるぞ。ついでに言っとくが、法に触れるマネは何もしてないからな』
「何かしていたのか？」
『技術者と言う奴は法を綱で渡つとるもんだ。疑わしき行動の一つや二つはある。警察さん、わしを礼状なしに何の容疑でガサ入れする気かな』
「法令遵守が警察のモットーでね。貴方の息子さんを名乗る人が、企業の敷地前でオロオロしていましたから保護したまでです。貴方の住所の確認をしました」
『何だ、入り方すら教えとらんのか。アルフめ、また面倒臭がったな』
ナイアスはヨシュアの脇に来て、プログラムとして映っているトーマスと対面した。「父さん、ナイアスです。すみません。企業の敷地に入る手段がわからなくて、警察が来てしまいました」
『知つとるよ、でなければ警察から連絡は来んよ。むしろ丁度よかったよ。パトカーに乗ってわしのいる建物まで来てくれ。入るならアルフがキーを入れているから問題ない。入れてないなら、お前の代わりに文句をたたき付けてやる』
「すみません」
『警察の方、IDからして名前はヨシュアと言ったか。敷地の入り方すらわからん、頭の悪い息子を指定した建物まで運んでくれ』
ヨシュアは眉をひそめた。警察は警らや事件の処理を始め、多忙な任務を負っている。タクシーではない。「中に入る処理をすればいいですね。私はタクシー業者ではなく多忙なので、敷地に入るまでの誘導しか出来ません」
『事情は把握した。なら通してくれ。次は息子が勝手にやる』回線が切れて、プログラムが消えた。
ヨシュアはチャイルド・キットの方を向いた。「彼を敷地内に入れる処理をしる。ついでにロボットの警報対処を解除して解散命令を出せ」
「確保せずともよろしいですか？」
「誰が捕まえろと言った。何を聞いている。関係者を通せと言っているんだから通す処理をするんだ」
『はい』警察型チャイルド・キットはヨシュアの罵声にひるまず、ナイアスに集まっているロボットの方を向いた。ナイアスが不審者ではないと識別するプログラムを警備ロボットに送信した。警備ロボットは一斉に解散した。
警察型チャイルド・キットはナイアスの方を向き、目を通してスキャンをした。危険物の類いはない。『危険物は確認できません。ナイアス＝シン様。ゲートに来てください』ゲートに向かって歩き出した。
ナイアスとヨシュアは警察型チャイルド・キットに続いた。
警察型チャイルド・キットはゲートの脇にある液晶案内に手を当てた。液晶画面が切り替わり、認証をする。電子音と共にゲートが上に上がっていく。
「警備員はいないんですか？」
『関係者は条件で判断し、自動で認証します。条件がない人間は排除するだけです。選別作業に人は不要です』
「確かに」ナイアスは警察型チャイルド・キットの言葉に納得した。プリセットしているデータで認証した存在だけを通せばいいので、人を介さずともコンピューターで容易にできる。アルフの言っていた、ロボットが人の仕事を奪うとは今の状況を示している。「チャイルド・キットって警察業務もやるんですね」
「警察ってのは人手不足だからな。珍しいか？」
「田舎者ですから」
ヨシュアは笑った。「特に人手がないのが介護だ。病院に行けば人間より沢山いるぞ」
「はあ」ナイアスは曖昧に返事をした。
ナイアスと警察型チャイルド・キットはパトロールカーに引き返した。
ナイアスは開いたゲートの先に向かって歩き出した。ゲートを通じた先は超高層ビル群が熱帯雨林の木々の如く立ち並ぶ世界があった。人々が行き交っていて、一見すると活気のある街に見える。ゲートが閉まった。
ナイアスはカードをかざした。地図がプログラムで浮かび上がる。案内通りに歩いていく。公共機関による移動も選択にあるが、待ち時間で相殺すると同じ時間になると、街の雰囲気を楽しむ為に歩きで十分だと判断した。
道路は電気式の自動車がすれ違う。ラウンドアバウトが大通りを交差する場所に設置してある。運転席に人が乗っているがハンドルは緊急時のマニュアル操作のみに使う。通常は道路に埋め込んだ給電を兼ねた制御装置や衛星による位置情報により無人で動く。
歩道では行き交う人々に紛れて、チャイルド・キットや非人型ロボットが清掃や運搬をしている。人々は目をくれずに歩いている。
見慣れない光景は田舎者のナイアスにとって珍しさの塊だった。
暫く案内に従って歩いていく。途中で入り組んだ道に入った。
徐々にビルが立ち並ぶエリアから外れ、人気も少なくなってきた。
汚れが見える高層ビルが立ち並ぶエリアに来た。道は整っているものの、ゴミや破片が道路の角に散らばっている。
ナイアスは不安になり、カードから映るプログラムを確認した。居場所やルートに間違いはない。ただし正確な道が映らず、自身がいる場所は立体的な建物の中を示している。
引き下がるにも、見慣れず入り組んだ道を逆に進むのは難がある。地元の人に聞くにも、物騒な場所で聞けば返答の代わりにナイフと銃弾が返ってくる。
やむなく案内へのルートに向かう形で、入り組んだ道を進んでいく。
次第にますます荒れた道に出ていく。
ナイアスは余計に不安になった。衛星を経由しているのだから迷いはなく目標に向かってるのは分かる。問題は治安を含めた一切の情報がない点だ。道を進むと行き止まりに出て、回り道を繰り返している。浮浪者やストリートギャングの風貌をした人間に遭遇するも、自分に興味を持たなかったのは幸いだった。学生の格好をしているので、社会の地位もないと見なし、襲っても何の利益もない迷人と判断していた。自身も関わるのを防ぐため、誰とも話をしなかった。
またしても行き止まりに会う。引き返し、直前の通りを案内に映るルートに近い側に曲がる。外階段が付いた雑居ビルの元に古びた自動車が止まっていて、ギャング達が我が物顔で歩いている。
ナイアスはチャイルド・キットが誰もいないのに気づいた。子供でも扱えるとはいえ、一体を手に入れるのに相応の金と契約が必要になる。金も学もない人にとって、チャイルド・キットは簡単

に手に入る存在ではない。むしろ学がなくても就ける仕事を奪い、金銭と生活を得る権利を削り取った敵と捉えていた。

案内通りに進んでいくと、地下トンネルへの歩道があり、脇に広場がある。

地下トンネルは半マイル程の幅の川を挟んでいて、黄色の光が内側から漏れている。車通りはまばらで、脇に歩道がある。

ナイアスはカードから浮かぶホログラムの地図とを見比べた。橋を渡るルートがあるものの2マイルも先で、遠回りすると4マイルも無駄になる。行き止まりと遠回りの繰り返りで疲弊している。今以上に消耗する気はない。休憩を取るために広場に向かった。広場に施設があれば、地図データをダウンロードできるかも知れない。

広場の中は薄汚れた白いブロックで覆っている。中央にオペリスクを模したモニュメントが立っていて、人々がストリートスポーツをしていた。ブロックは高さは一定で、ゴミは散乱していない。

ナイアスは広場に入り、施設がないか探し回る為、オペリスクに向かって歩く。単純な仕事はチャイルド・キットがロボットがするのが相場だ。人よりは話を通じる。オペリスクに向かったのは広場の通路から外れた場合、出口にたどり着ける自信がないからだ。公園や広場はメイン通りから外れた場合、通路が入り組み同じ光景が続く道に出る。冒険をする気力はない。

オペリスクの前で人が集まっているのが見えた。同時になめらかなで透き通った歌声が響いてくる。

ナイアスは人が集まっている先から歌が聞こえているのに気づいた。施設を探すのが目当てだったが、声の綺麗さに興味を抱いた。気づいた時にはオペリスクの前で人をかき分けていた。オペリスクの前では、汚れきった男が座っていた。目の前にはボディが破損している端末が置いてあり、ホログラムでコードが映っている。男の隣には女性がみずぼらしい服を着て歌を歌っている。羞恥心はなく、歌を歌うのに集中している。歌はラジオでよく流れる伝統とも言える、誰もが知っている滑らかな曲調だった。音楽は流れていない。完璧なまでのアカペラで歌っている。歌の内容はテレビジョンで流れる流行の歌ではなく、音楽の教科で習う童謡だ。誰もが聞いているので馴染みがある。

人々は女性の姿を見つめていた。集まっている人々は皆、真剣な面持ちで女性を見つめている。

女性は歌を歌い終えた。人々から惜みない拍手が飛んだ。

男は立ち上がり、女性の前に出た。「お前ら、良かったなら拍手じゃなくて金をよこせ」

人々は嫌悪の表情をした。コードは男の電子マネーの口座にリンクしていて、かざして振り込む金を入れれば金が男の元に入る。現在では紙幣の類いは一切使用できず、貧民であっても端末の所持は必須だ。一般市民は薄いカード状の端末になっているが、貧民は公務員を嫌う傾向があるので更新の手続きを嫌い、旧型のノート状の大型端末になっている。

人々は男の体から漂う匂いに不快を示し、拡散していく。女性は立ち尽くすだけで動かない。

男は近い位置に居るナイアスに近づいた。「お前、聞いてたんだ。タダで聞こうって甘いんだよ、金くらい出せよ。身なりが良いんだからよ、小遣いくらい出したって文句はねえよな」

ナイアスは男の口の臭いに不快になり、顔をしかめて引き下がる。

「なあ」男は大声を上げた。ナイアスは男の大声に一瞬、ひるんだ。ナイアスの反応を見て不敵な笑みを浮かべた。臆病者だ、脅せば金を出すタイプだ。「お前みてえなガキが来ていい場所じゃねえんだよ。大体なめ」

「すみません、もめないで下さい」女性は抑揚の薄い声を上げ、ぎこちない動きで男の元に近づいた。「互いに不快なままでは何も解決しません」

ナイアスは女性の動きを見て違和感を覚えた。見た目は五体満足にも関わらず、動きが不安定だ。中に人が入っている動きに似ている。

男は女性の方を向いた。「うるせえ、誰が拾ってやったんだ。黙って感謝して俺の味方をしろ」

「拾った」ナイアスは男の言葉をオウム返しに言った。女性の姿は男よりも若い、血縁関係があると自称しても納得は出来ない。女性のふくよかな体格からして、拾って育てたとは認識しにくい。親と同じ環境で育ったなら、似た体型に近づいていくのが普通だ。

「ジロジロ見てんじゃねえよ。金を出せば良いんだよ。カードを見せろ、よこせ」男はナイアスに殴りかかった。男の腕の動きは軽く、子供でなければ軽くかわしていなせる速度だった。

ナイアスは男の拳を避けた。男の拳は空を切る。直後に伸ばした腕をわざとかばった。「痛え、野郎俺が貧弱だからって、避けてカウンター決めやがった」わざと大声を出す。人々は何事かと男の方を向くも、まもなく目を背けた。男の演技は日常茶飯事で、周りの人間もわかりきっていた。

「やつが俺をいじめやがる。貧乏人に文句言って、けななしの金を取る気だぞ」男は声を上げて周りに訴えた。特に反応しない。

「演技だって分かってますよ」女性は男に声をかけた。

男は女性をにらんだ。「いちいち言ってんじゃねえ」男は女性の足を蹴り飛ばした。

女性は反応せずに男を払い、ナイアスの前に来た。「すみません、ご迷惑をおかけしました」頭を下げた。

ナイアスは女性に違和感を覚えた。男と同じみずぼらしい服を着ているが、大衆が一切ない。女性の目を見た。透明な虹彩の奥に、カメラのレンズに似た部品とコードが見える。「サイボーグですか」女性に尋ねた。今の時代、欠損した体の部位は脳や直結している神経を除いて機械で補える。

「私はサイボーグではありません。人間はチャイルド・キットと呼んでいます」女性は淡々と答えた。

ナイアスは女性の姿に驚いた。一見して人間と代わりはない。服からはみ出ている肌は透き通っていて、皮膚のシワも人と変わりはない。初期型は見た目が人と変わりなく近づけたと聞いているが、実際に動いているのを見るのは初めてだ。「チャイルド・キットが歌を」

「はい」女性は頭を下げた。「前のマスターが歌っていたのを覚えていました。私が歌えば喜んでくれました」

ナイアスは女性の動きを見て、動きのぎこちなさを理解した。初期型は短期間しか生産しておらず、部品もない。隣にいる男がまともなメンテナンスをするかと言えば、否なのは態度を見れば分かる。内部の部品が破損していて、まともに動かないのだ。

「非合法の改造を」ナイアスは女性に尋ねた。チャイルド・キットは文化を学習し、個性を持つのを防ぐため、購入時にプリセットした情報を基礎とした最低限の学習しか出来ず、容量に制限がかかっている。個性を持って人間の不便さを解消するために製造したチャイルド・キットの意義が揺らぐ。

「元々なのか後からなのかはわかりません。前のマスターは私を自分の子供と重ね、世界や歌についてよく教えてくれました」

「今は」

女性は首を振った。

ナイアスは小さくうなづいた。前のマスターが亡くなった時、遺族が廃棄したのを男が拾い、データを消さないまま認証したのだ。機械であるが為に完璧な歌を披露できるのを利用し、日銭を稼いでいるのだ。

男はナイアスの前に出た。「下らねえ話をしてるんじゃねえ。話の続きを聞きたきゃ金を払え」

ナイアスはカードを操作した。

男は笑みを浮かべた。金を恵んでくれると予想した。

ナイアスのカードから、立体地図が現れた。目標と現在地が映っている。現在地は建物の中にめり込んでいる。「座標がずれているんだ。目標地点に行きたいんだけど、トンネルを通過して行けばたどり着けるかな」

男は舌打ちをした。「おい、俺は案内人じゃねえんだ。金を」

「私のメモリーには周辺の情報があります。ただし貴方のデータよりも古く、ネットワークにも接続できないので、正確さに欠けます」女性は淡々と答え、手を差し出した。手のひらに内蔵してあるカメラからホログラムの映像が映る。

映像は立体地図で、川の下を通るトンネルを通った先に大通りと案内板がある。

「貴方が保持している座標と、私が保持している座標とを照合して同期します」
女性はナイアスのカードを見つめた。目のレンズを通して、ナイアスのカードのデータを読み込んだ。カードを通してネットワークに接続し、周辺のネットワークの座標を読み込む。地図に読み込んだ座標と、カードの座標とを測量の原理で計測し、正確な座標と共に地図を修正する。
目標までのルートが改めて映る。広場から出てトンネルを通り、大通りに向かってビル街から離れた場所に線が現れた。
ナイアスは女性の方を向いた。「ありがとう、道がずれていて不安だったんだ」
「お役に立てれば十分です」
「おい、お前」男は女性の前に出た。「案内までしてやったんだ、金の一つでもくれてんだ」
ナイアスは渋々カードを操作した。男はにやけて端末を操作し、コードを出した。ない明日は半透明のカードで端末を透かしてみた。端末のコードを認証した。
ウィンドウが映る。指で操作して送金した。
男のデータに送金が完了した旨の表示が現れる。男はナイアスに笑みを浮かべた。「感謝するぞ、次もサービスしてやるからな」
「ありがとう」ナイアスは女性に声をかけ、オペリスクの前から出ていった。
女性はぎこちなく頭を下げた。
ナイアスは広場から出て、脇にある川の下を通るトンネルを通った。
トンネルの中は車が通る音が響いている。歩道にはホームレスがゴザを敷いて寝ていて、脇には治安維持を推奨する液晶が流れている。行き交う人は少ない。
ナイアスは薄暗く、液晶と天井の黄色い光だけが歩道を闇を照らす光景に不気味さを覚えた。寝転がっているホームレスは、起き上がって自分の首を絞めるか噛み付いて殺すかのゾンビに見えた。
早速でトンネルを抜け、トンネルから外に出た。
街頭テレビから流れる音楽と、車と人が発する音が混ざっている。白と黒を基調とした超高層ビルが囲っている。ナイアスは無機質で狭いかごのごとくビルで囲った世界に安心した。広場の広くて遮る物体がない場所は不安になる、
ナイアスは案内板を探した。ラウンドアバウトの脇に設置してあるのが見えた。近づいてカードをかざした。案内板はカードを近づけた。地図と共に周辺の状況が映る。目標近辺の治安は安定している。自分が通ってきた川の対岸側は治安が安定せず、観光で来る人間は近づくのを禁止する旨のダイアログが映っている。昔のマンハッタンとブルックリンに似ている。データをダウンロードして、カードを操作した。立体地図が映る。ナイアスは案内に従い、目標に向かって進んでいった。
案内に従って進んだ先は、巨大なビル群が植え込む区域から離れた、高層ビルが立ち並ぶ区画だった。華やかな超高層ビルに慣れていると大した高さではないと錯覚するが、10階建てのビルが所狭しと並んでいる光景は、緑とブロック塀で囲った家に慣れた人間にとって、まだ都会の一部だと認識できた。
ナイアスはビルの前に来た。
ガラス張りのドアで、隣にカードによる認証端末になっている。不特定多数の人間が出入りする住居では、特定の人間以外を排除する生体認証ではなく、カード式が良いのだ。
ナイアスはカードをかざした。エラーが出て警備員が来たなら、入り口で警察が来た時と同じく、最初からアポイントを取っていたと話せばいい。
液晶に認証が完了した旨の表示が出る。
ドアに設置してある、半透明の電子キー端末が起動する鈍い音がした。内部にあるギアが回転して、ドアの端から上部に接続している金属の棒が上がる。ドアの脇に隙間が出来て、ドアが隙間に入り込んだ。『認証しました。お入り下さい』
ナイアスは開ききったドアを見た。隙間に入り込んでいる。ビルに入り、ロビーに来た。
ロビーは無人で、自動車が2、3台入るスペースがある。チャイルド・キットがエレベーター前の受付で待機している。
ナイアスはチャイルド・キットに近づいた。「すみません、トーマス=シンに会いに来たのですが」カードを差し出した。
チャイルド・キットはナイアスの方を向き、カードを受け取った。『トーマス=シン様に接続します』手を机にある端末に触れた。認証をしてトーマスの部屋に接続する。
『部屋は空いています。カードによる認証で立ち入りができます』
「勝手に行っていいかい」
『貴方が持っているカードで認証が可能です。部屋番号を書き込んでおきました』チャイルド・キットはナイアスにカードを差し出した。ナイアスはカードを受け取り、なぞって操作した。カードに映るメニュー画面から、ビル内の立体案内図の項目が追加してある。メニューを操作した。ビルの立体映像が浮かび上がり、同時に現在位置とトーマスの部屋の場所が色のついた球体で示してある。
『大丈夫ですか』チャイルド・キットはナイアスに尋ねた。
ナイアスはチャイルド・キットの質問に驚いた。何の感情も持たない存在が人を気遣う言葉を発するとは予想していなかった。「大丈夫だよ、迷ったら戻ってくるから」
『解決したのなら、私の役割は終わりです。ありがとうございました』
ナイアスはチャイルド・キットから離れた。気遣ったのではなく、質問の回答が意図通りだったかを確認したに過ぎないのだと気づいた。人間同士ですら互いを気遣うのに苦労する。チャイルド・キットに気遣いは出来ない。
エレベーターに近づいた。自動でドアが開く。エレベーターに入ると、センサーがカードを検知した。ドアが閉まり、指定した階まで上昇した。
指定した階に到着し、ドアが開いた。ナイアスはカードのホログラムに映る案内に従い、廊下を進んでいく。
ナイアスはトーマスの部屋の前まで来た。ドアは艶のある赤で染まっっていて、箱根細工のパネルラインを持っている。ドアの前や隣には何も無い。カードを操作し、ホログラムを切るとドアの前にかざした。カードのランプが光って認証し、パネルラインが次々に展開してドアが端へと折りたたんでいく。
先に廊下が見える。機械部品が端に転がっていて、中央しか歩く場所がない。
「いますか」ナイアスは声かけた。何も返事がない。奥から来る冷たい空気に不審を覚えつつ、部屋に入った。
オゾンの匂いに塗れた薄暗い廊下を進み、奥にある部屋の前に来た。ドアに手をかけ、開ける。
オフィスの一室並みの広さの一室に、切り刻んだ人間の体が無数に転がっている。端にはチャイルド・キットがコードをむき出しにした状態で横たわっていて、部品が山盛りで箱に入っている。
壮年の薄汚れた格好をしたトーマスが、チャイルド・キットの前で笑みを浮かべながら多重に浮かび上がる情報を見ながら調整していた。
ナイアスは人の体が転がっているのに不気味さを覚え、観察した。切り口の部分は機械で、コードやプラグがむき出しになっている。「父さん」ナイアスはトーマスに声をかけた。
トーマスは手に持っている端末を操作した。浮かび上がる情報が一斉に消えた。「おお、息子か。よく来てくれた。アルフから話は聞いているぞ」ナイアスに近づき、抱擁した。
「父さん。母さんに連絡もよこさないで、マッドサイエンティストにでもなったのかい」
トーマスはナイアスから離れ、足の部品を手にとった。感触は人に近い。「人間を分解して作ってるんじゃないよね」
「初期型のチャイルド・キットの部品だぞ。最初は人と同じ姿をしたアンドロイドだ。ただし切っても叩いても傷はつかんがな。周りが不気味がるわ、猟奇な趣味に使う奴が居るわですぐ打ち切ったんだ」机に向かい、棚から緑色のカードを1枚手に取った。
ナイアスは足の部品を元の場所に置いた。「知ってるよ、広場で会った」

トーマスは手を止めた。「今、なんと言ったか」
「広場で会ったと言ったんだ。きれいな女性の格好をしていたよ。ぎこちない動きでさ」
トーマスはナイアスの元に早足で寄った。「今は既にない代物だぞ、なにせチャイルド・キットの初期型は生産を打ち切ったのは10年以上前だ。ゴミ捨て場から拾ったのか、セクサロイドとして使っているのか」
「歌を歌っていた」ナイアスはカードを取り出し、データと呼び出した。出納に関する内容で、男に電子マネーを渡した履歴が残っている。指でなぞって履歴の詳細を写した。20分前に広場のある座標で1ドルを渡している。男の身分はIDで映っている。
トーマスはデータを眺めた。「歌を歌っていたのは本当なのか、チャイルド・キットは文化継承は禁止しているんだぞ」
「当人も言ってたっけな」ナイアスは曖昧に言った。
「リミットを外したか、とはいえ平然と徘徊しているとはにはわかには信じがたい。即座に警察が動くぞ」トーマスは机に向かい、端末を操作した。多重のウィンドウが展開する。次々に現れるウィンドウからデータの検索をかける。金を渡した位置から、チャイルド・キットの存在の真偽を確認している。通常、チャイルド・キットはネットワークに紐付けしている。意識がないのでマスターの言葉通り犯罪行為に加担する、虐待をして芽を生む要因を作っていると見なした場合、ネットワークで検知して警察が即座に駆けつける。文化継承が発生しているとなれば、メーカーにとって最大の懸念していた問題が発生するので、目の前で大量殺人が発生したのと同じレベルの優先度で処理にかかる。メーカーは過剰に深刻に扱っている。問題は深刻なのだ。事件が発生している場所と座標が一致していれば、ナイアスの言葉が事実だとわかる。
検索した結果が映った。事件は起きず、警察も動いていない。
トーマスは検索結果に眉をひそめた。
「何かあるのかい」
「ネットワークに繋がっていないのか」
「分からないよ。でも古い地図のデータだと言っていた」ない明日はカードを操作し、立体地図の更新履歴を開いた。広場で更新した時間の履歴を見せる。更新をした相手のIDが映る。
トーマスはIDから検索をかけた。検索結果は映らない。やむなく自分が所属しているメーカーに入り、操作して深層のデータベースに入った。チャイルド・キットの購入履歴を、製造販売初期から調べていく。一つのIDにあたった。購入者の名前はカーチス＝マグワイアで、80代の男となっている。備考欄には心臓に疾患があるとの記述があった。日常生活に支障をきたしているの、介護を理由に購入したと予測できる。
ナイアスはデータを見た。「名前、知ってるよ」
「俺も同姓同名の人間なら知っている。ハドソン出身の歌手だ。20年前に死んだのはテレビで見た。仮に別人だとしても、既に死んでいる可能性が高いな」
「なんで分かるんだ」
「生きていたとすれば、別のチャイルド・キットに交換している」トーマスは隅に転がっている初期型のチャイルド・キットの部品を見た。既に生産が終了していて、メンテナンスは不可能だ。普通なら現行型に交換している。実際には購入履歴に新規購入や処分の履歴がない。処分する前に亡くなり、遺族がメーカーに連絡しないで処分したのだ。イレギュラーなチャイルド・キットが存在しているとなれば、保護して解析に回せば新たな技術を得るきっかけになる。「場所に案内してくれ、会って保護しなければならん」
「会うって、すぐに」ナイアスはトーマスに尋ねた。
「当たり前だ、すぐだ。警察に知れば即処分にかかる。行動に移す前に先手を取るんだ」トーマスは興奮気味に答え、部屋から出ていった。
ナイアスはトーマスに続いた。

ヨシュアはパトロールカーを道端に止め、サンドイッチを頬張っていた。窓からはブルックリンのアパートに近い、赤レンガで出来た建物が並んでいる。クラウド。シティが華やかなのは一部だけで、底辺を這いずり回ればいくらかでも似た光景はある。サンドイッチを食べ終え、喉を通して胃袋に流す。
ダッシュボードに連絡が入った。電子音が鳴り響くと同時に、連絡元が浮かび上がった。警察署の本部からだ。
ヨシュアは回線元のスイッチを入れた。
『休みか、突然で済まないな』署長の声が響いた。
「突然の用事は警察の職業です。署長が直に連絡してくるとは珍しい。問題でもありましたか」
『重大な問題が出てきた。お前が処理に定評があるので優先して連絡する』立体地図が浮かび上がった。広場の周辺で、クラウド・シティの外れを現在地で示している。対して目標地点似アイコンが付いている。場所は川を超えた先にある広場の遊具施設だ。『広場にて一瞬だが、チャイルド・キットの反応があった』
『反応事態は珍しくもない。チャイルド・キットまみれのクラウド・シティじゃ日常茶飯事です。奴等が犯罪でも引き起こしましたか』
『犯罪とはならんが、反応を調べると興味深い結果が出てきた』立体地図が消え、代わりに女性のチャイルド・キットのデータが現れる。
「随分旧式ですね」
『初期型だ』
「初期型って、今時使ってる奴がいるんですか。部品だってないんでしょ」
『事実として存在している。チップを抜き取って交換した可能性もある』
「単に初期型がうるついているだけで、調べてこいって無茶苦茶ですよ。午前中だって、緊急だって連絡が入って行ってみたらゲートでガキ一人が引っかかっていただけです。平和なのはいいんですけどね」ヨシュアはディスプレイに映る情報を見た。チャイルド・キットの仕様が現れる。トーマスが見ていたのと同じデータベースで、警察が保有している籍と照合していく。既に主は亡くなっている。野良になったチャイルド・キットを何者かがフォーマットしないで使用していると見ていい。
『登録者が存在しないチャイルド・キットは危険だ。制御のない機械は何をしてかすか分からんからな。居場所を確認して保護しろ』
「はいはい、分かりましたよ。お役人は上には逆らえませんがね」ヨシュアは回線を切り、別のウィンドウを開いて地図の座標を打ち込んだ。チャイルド・キットは登録者が変わった場合、フォーマットをして変更の義務がある。登録者に従う関係から、フォーマットをしないと別の人間に前の主と同じ対処をする可能性があるからだ。実際にはフォーマットをしなくても使えるのなら問題なく、罰則はない。家族間で共有している場合、引き継いだのが家族ならフォーマットをしなくとも問題はなく、影響も少ない。むしろ作業に時間や金を消費するので、引き継ぐ相手が近くにいる、チャイルド・キットとも関係を持っているならやらなければならないのが当然になっている。
『向かうのですか』後部座席に待機している、チャイルド・キットはヨシュアに尋ねた。
「面倒くさくてもやる。仕事ってのは、意味を問わずにやらなきゃいかんのだよ」ヨシュアは入力を終えた。
パトロールカーは自動で制御して、広場の座標に向けて動き出す。街中の車両にもリンクし、自動で避けていく。
超高層ビル群から広場へ一直線に向かった。

10階建て程の建物が並ぶ区域に入った。入り組んだ道を通る。ナイアスが持っていた地図と異なり、更新しているので正確に地図上のデータ通りに進む。ヨシユアは窓から見える景色を眺めた。最新の設備に制御を誇る企業城下町といえど、街全体をカバーしているわけではない。恩恵を受ける人がいるなら、遠ざかってしまう人もいる。自分はただ恵まれている部類だと、通り過ぎる下層の人間を眺めて認識した。

パトロールカーは広場の前に着いた。ヨシユアはダッシュボードに入っているカードを取り出し、ドアを開けて外に出た。チャイルド・キットが後部座席から出てきた。広場の方を見た。人が集まっていた。後部のトランクを開けて箱を開けた。対ロボット用の、ピーブサイトにセンサーが付いたライフルと弾丸の入ったマガジンが入っている。ライフルとマガジンを手に取り、装填して偽装するための袋に入れて背負った。

『破壊ですか』警備用チャイルド・キットはヨシユアに尋ねた。『状況次第だ。安心しろ、人には使えん玩具だ』ヨシユアは広場に向かった。警備型チャイルドキットが続いた。人々は警察官とチャイルド・キットの姿に慄くも引き下がらない。警察が物騒な格好で見回りに来るのは区域内では珍しくない。エリートの間は明らかに階級だと分かる人間には、異常なまでに見下し人権無視な因縁をつけて逮捕する。検挙ノルマを稼ぐには都合がいいのだ。

『奴の居場所は』ヨシユアは警備型チャイルド・キットに尋ねた。ライフルを持っているので両手がふさがっている。『現在は回線が切れています。シグナルの発生が古く、不安定なのが原因と推測できます。履歴を追っていきますと、オペリスク前に反応があり、移動の履歴がありません。動きを止めています』「分かった」ヨシユアはオペリスク前に向かった。徐々に澄んだ歌声が聞こえてくる。

人々がオペリスク前に集まっている。ヨシユアは人々をかき分けて人々の前に来る。汚れきった男がオペリスク前の壇に座っていて、女性が清らかな声で歌を歌っている。ヨシユアは女性の前に来た。男は警察の姿に驚き、女性は歌を止めた。

『警察が何だ』男は警察の前に来た。『チャイルド・キットだな』ヨシユアは男に尋ねた。『知らねえよ、仕事の邪魔すんじゃない』

警備型のチャイルド・キットは女性の方を向いた。女性の体を目のカメラで読み込み、内蔵しているデータベースと照合する。『初期型です。シリアルナンバーは』「言わずとも凶る手段はある」ヨシユアは袋からライフルを出し、銃口を男に突きつけた。男は目に映る銃口と、バレルの奥の闇に恐怖を覚えた。人々は突然ライフルを出した警察官に驚き、トリガーを引いた先の光景から目を背ける為に引き下がっていく。「まさか、俺を撃とうってんじゃないやねえよ」

ヨシユアは笑みを浮かべた。「連れはチャイルド・キットだな」「知らねえよ、俺は金を稼ぎたいだけだ」男は強弁を発する。ヨシユアは男をならみつけ、センサーを立ててトリガーに手をかけた。センサーの液晶には男の心拍数や筋肉の動きが数値になって映っている。

男は腰を抜かした。ヨシユアは男から女性に銃口を向けた。センサーは心拍数はなく、代わりに電子脳が放つ電気泳動が映る。女性は何事かと停止した状態で、ヨシユアを見ている。

ヨシユアは女性の態度で確信し、トリガーを引いた。銃声が響くと同時に、銃の反動がヨシユアに伝わる。火薬の匂いが鼻につく。銃弾は女性の頭を撃ち抜いた。頭は砕け、切断したコードから火花を発して倒れた。回路が切れた女性のチャイルド・キットはまもなく機能を停止した。

男はヨシユアの姿に恐怖した。真っ直ぐな瞳で迷いが無い。トーマスとナイアスが駆けつけた。すでに女性のチャイルド・キットは動きを止め、ヨシユアが表情人使えずにライフルを下ろしていた。人々は突然の出来事に困惑して立ち尽くしていた。見た目は人と同じだけに、倒れているチャイルド・キットとヨシユアの姿に戦慄と同情が入り混じっていた。

『破壊したのか』トーマスは声を上げた。ヨシユアはトーマスの声に気づき、声がした方に向いた。「トーマス博士」『チャイルド・キットは人の財産だ。令状なしに撃ち抜くのは損壊罪になるぞ』

ヨシユアは男を見た。男は震えている。銃弾が自分に飛ぶのではないかと、妄想が体を支配していた。『チャイルド・キットに文化継承の懸念がある場合、即時破壊を優先する。分かっていますな、博士』トーマスは顔をしかめた。「確信がある場合だけだ」

ヨシユアはライフルからマガジンを外し、腰のホルスターに入れた。ライフルのセンサーを外した。「データならある。一つはライフルで、次に」破壊した女性のチャイルド・キットに目をやった。トーマスはため息をついた。

『博士の技量を見込み、メモリの解析にご同行できますかな』「警察署内なら解析の専門家がいるのにか」『質問の答えだ。警察は倫理の中でしか判断しない。イレギュラーな出来事なら対応できる人間に頼む。ついで君達は目撃者だ。理由は何にせよ事情聴取を受ける羽目になる。なら任意同行で話をした方が早く終わる。俺も面倒な手続きは嫌いなんでな』

ヨシユアは男に近づいた。「お前からも事情を聞く」『お、俺は何も知らねえよ。勝手にマスターって呼んでただけだ。何も悪くない』男は逃げ腰でヨシユアから引き下がっていく。ヨシユアは男の先に回って襟をつかみ、地面に倒した。男は衝撃で息がつまり、気を失った。

『応援を呼びました。1分以内に来ます』警備型のチャイルド・キットが声をかけた。トーマスとナイアスは壊れた女性のチャイルド・キットを見つめていた。人と同じ格好で倒れている。頭は砕けていて、血と内蔵の代わりに機械部品が散らばっていた。

警備型のチャイルド・キットは二人の前に来た。『貴方達は証人として署まで同行願います。なお拒否する場合は』「何もせずとも行くよ」ナイアスは力なく言い、トーマスの方を向いた。「ごめん、変に巻き込んで」『警察が破壊するまでの存在だ、イレギュラーなチャイルド・キットがいるのは確かだ』トーマスは壊れたチャイルド・キットに目をやった。ヨシユアが砕けた頭からメモリの入ったチップとカードを回収している。「俺もメモリに興味があるしな」

サイレンの音が響き渡る。警察が次々と駆けつけてきた。調査は後続の警察官がする手はずになっている。実際に鑑識が混じっていた。ヨシユアは自分の役割を終えたとみなし、ナイアスとトーマスを警備型チャイルド・キットの誘導に従い、パトロー

ルカーに連れて行った。

ヨシュアは警備型チャイルド・キット共にトーマスとナイアスを連れてパトロールカーに向かった。「今まで解析できなかった理由を調べてくれ」壊したチャイルド・キットのカードを警備型チャイルド・キットに渡した。

警備型チャイルド・キットはヨシュアからカードを受け取り、目を通して読み込んだ。カードからオンラインデータのログが浮かぶ。「現在から2時間前まではオンラインで接続していましたが、以前のログがありません。余りにもネットワークの方が古く、アップデートをするにも接続するためのルーターが存在しなかったためです。オンラインで接続できたのはナイアス・シンが地図を同期した際、ネットワークの通信暗号を同時に受信して照合したからです」

ヨシュアはカードから映る情報を目をやった。ログを確認してからナイアスに目を向けた。「君のおかげで対象を見つけたという訳か」

ナイアスはヨシュアと目が合った。視線をそらした。

ヨシュアはパトロールカーの運転席のドアを開け、中から無線機を取り出した。警察に限らず専用回線は傍受を防ぐためアナログな手段で中継基地を介して接続している。「もし、聞こえるか。ヨシュアだ。関係者2名を保護した。容疑はないから取調室じゃなくて編纂室で尋問する。無論、所持品は解析班に回す」

『了解した。捜査班は事件処理と共に発砲の適性検査に入る。整理後直ちに出勤せよ』

「分かった」ヨシュアは無線機を元の場所に置いた。「乗れ」

後部座席のドアが開いた。トーマスとナイアスは後部座席に乗った。警備型チャイルド・キットが乗り込んだ。ドアがしまった。

ヨシュアは運転席のドアを開けて乗り込んだ。ドアが閉まる。

パトロールカーは警察署に向かって発車した。

車内は重い空気で、誰も口を開けなかった。

ヨシュアは空気を軽くするために口を開いた。理由があるとは言え、銃を民間人の所有物に使用した為に適正捜査を受け、容疑が晴れるまでの間はデスクワークで警察署に泊まりこむとの話だ。警察は発砲に権利があるとは言え、無傷で相手を捕縛するのが基本なので殺傷や破壊行為は正当な理由がない限り処罰を受ける。銃の扱いは特に慎重で、よほどの理由がない限り謹慎になると話した。現場仕事から離れるのが嫌なのが、本人の退屈さの混じった口調から明かされた。

警察署に到着するなり、警察は二人の荷物を没収した。身分証明を兼ねたカードも例外ではない。

編纂室に入った。書類が棚にあふれる程に並んでいた。机は端末が置いてある場所以外、ファイルが隙間を埋めている。人は誰もいない。

ヨシュアと同行しているチャイルド・キットは部屋に入ったナイアスとトーマスの前に出て、椅子を引いた。『おすわり下さい』

ナイアスとトーマスは、引いた椅子に腰掛けた。

暫く経過した。ヨシュアが入ってきた。「本当なら一人ひとりで話をするんだが面倒くさいんで、一度に尋問する」席に座り、机においてある板状の端末をつついた。多重にウィンドウが展開する。

トーマスはウィンドウを見て顔をしかめた。チャイルド・キットに含んでいるデータだけではなく、自分が会社にアクセスした内容も映っている。自分の身分から一瞬でログを解析したのだ。

老年の男のデータが映る。

「チャイルド・キットの所有者はカーチス・マグワイアだ。ハドソン出身の歌手で引退後、クラウド・シティに住み込んでいた。既に死亡している。隠居したまま特に公表しなかったからな。ある種伝説の歌手になった訳だ。保有していたチャイルド・キットは不明のままだったが、今回でやっと分かった。実に10年越しの決着だ」

「使役した男は」トーマスはヨシュアに尋ねた。

ヨシュアは端末を操作した。男の身分や状況が映る。「男はヨハン＝エイブラム。と言っても自称したのを元にデータベースから照合しただけで詳細は分かん。分かっているのは学がない、金がないでチャイルド・キットの保有資格を持っていない点だな」

「本来の持ち主ではないと」

ヨシュアはうなづいた。「調査は俺の処分が決まってからになるからだと推測しているので推測でしかないが、プログラムを抜かずに遺族が破棄したと予測できる」

ナイアスは顔をしかめた。トーマスの推測と同じだ。

ヨシュアは別のウィンドウに目をやった。チャイルド・キットのデータ内容が映っている。「介護の状況や態度に限界があると見えて、意図してリミットを外したと見える。自分の娘と錯覚し、歌を始めとする教養を教え込んでいる」

「錯覚だと」トーマスはヨシュアの言葉をオウム返しに言った。

「チャイルド・キットは商品だ。人間ではなく血縁関係もない。最低限の労働を果たすのなら、先を教える理由はない。対象を失えば廃棄するか誰かに譲るか。何にせよ真っ白にするんだ、意味はない」

「でも、歌を教えても何も損はしません。現に広場にいた人達は皆喜んでいましたよ」

ヨシュアはナイアスの言葉にうなづいた。「何故、チャイルド・キットが文化継承を禁じているか分かるか」

「人の仕事を奪うからですよね」

「いや、もっと根幹の問題だ」ヨシュアは端末を操作し、一つのウィンドウを出した。文化発展の系図を示している。「人が築き上げた文化や技術は安定しない。明確な答えがないから、発展し、時に淘汰して消滅していく。何が正しくて何が間違っているかは無い。結果として現れているだけだ」

「チャイルド・キットと何の関係があるのですか」

「チャイルド・キットは現状で正しい判断しにくい。徹底した効率を優先する。となれば現状で正しい技術しか継承しない。確固たる、完成した技術だけが残る」

「何が問題なんですか」

「環境が変わればまっさきに滅ぶのは強者だ。技術も同じで、正しいと勝手に判断した状況で環境が変われば不要になる。人なら残す判断ができるが、チャイルド・キットは出来ない。正しい技術しか残さないからだ。消えた技術は再現出来るが復活はしないんだ」

トーマスは黙った。過去の人工知能に置いて似た問題が発生した。現在でも解決できない。チャイルド・キットは汎用であるが、学習機能に限界がある理由だ。

「なら、人が正せばいい」

「出来たか」ヨシュアはナイアスに尋ねた。

ナイアスは黙った。

「出来ないさ。珍しい存在は居るだけで金になる。仕込まなくてもいいからな。しかも主と認証すれば誰にでも服従する素晴らしい道具だ」

「分かるには分かるが、破壊はやりすぎではないのか」トーマスはヨシュアに尋ねた。

「芽を潰すのもあるが、実際には嫉妬だよ。ロボットが普及した時に労働を奪い貧困を拡大すると危惧した。実際に奪ったのはエリート職で単純作業に影響がなかったので些細だったかな。頭が消えただけだったって話だ。けどな、ロボットが出来る作業が増えれば人間が出来る領域を奪うのは確実だ。俺達警察ってのもロボットじゃ善悪の判断を多角から判断できないから人間がやってるだけだ。法に反する奴を捕まえるだけならチャイルド・キットにだって出来る。むしろ有能だ」ヨシュアは編纂室の隅に立っている警備型チャイルド・キットに目をやった。

トーマスはため息をついた。「芸術の領域すら奪いかねんと、判断したのか」
「歌を歌うにしても、プログラムの一つでしかないけどな」
「タダのプログラムに過ぎないと。歌を歌っていたのを」
ヨシユアは笑みを浮かべた。「他に何がある。感情か、魂か。あるなら死を恐れるさ。消えれば再生出来ず、今の世界に影響を与えなくなるのだから」強い口調で言い切った。命を恐れるなら銃を向けた時に避ける。現に男に銃を向けた時は避けていた。命の消失を恐れたからだ。チャイルド・キットは銃を向けても恐れはなかった。プログラムに死を恐れる仕組みはない。機能の損失を計算に入れないからだ。

電子音が端末から鳴る。ナイアスが端末をつついた。「何だ」
『トーマス・シンとナイアス・シンのカードの解析が終わった』
「内容は」
『3枚あるカードのうち、2枚は身分証明だ。ナイアスのカードは破壊したチャイルド・キットとの接続履歴がある。地図の同期に関する内容で、チャイルド・キットが認証をコピーしている』
ウィンドウが映る。チャイルド・キットのオンラインアクセス履歴とナイアスとのアクセス履歴との比較が映る。互いに同期を図っていて、座標の同期以降はチャイルド・キットは暗号を元にオンラインにアクセスしている形跡がある。

ヨシユアはデータを見て、一息ついた。予想通りだ。「データの履歴は違法か」
『いえ、通常のアクセスです』
「なら問題ない。消しておけ。残りは1枚は」
『クライスという人物のデータです。記憶データの断片ですかね。画像や動画だけではなく、音声を含めたパーソナルデータの集合体です』
「クライス」ナイアスは声を上げた。

「知っているのか」
「弟だよ」トーマスは声を上げた。「私の弟だ。交通事故に会って妻を亡くした。クライスは息子で脳障害を起こしたんだ。身体機能をフォローするために脳にチップを埋め込んでいたが元々体が弱くて無理がたたってな、3年後に亡くなったよ。遺品としてチップを取り出して内部の記憶を解析したんだ。終わったので本人に届ける為に、息子のナイアス呼びつけたんだ」

ヨシユアは端末を操作し、クライスのデータを呼び出した。同姓同名の人物が映る。血縁関係者としてトーマスの名前を打ち込んで検索する。まもなく一人の名前がウィンドウに浮かび上がる。クライスのデータを映し出した。死亡を示す記号がついている。手術の履歴を見ると脳外科手術を含む、人体改造とも言えるまでの内容が書いてある。

「宅配でも使えばいい」
「記憶は複製できんからな。信頼できる人間に運んでもらうのが一番だ」
ヨシユアは顎に手を当てた。「息子の記憶を保持しておくのは分かる。誰だって過ぎた時間を保持しておきたいからな。だが職業柄下衆な推測をしてしまうんだ。仮にだ。記憶をチャイルド・キットに移植した場合、当人のままで振る舞えるか」

「何故聞く」
ヨシユアはうなづいた。「チャイルド・キットは出来合いのプログラムを入れた状態で出荷する。よって皆同じで、家族や環境に適応するには教育が必要になる。仮に記憶を埋め込めば、過ごしてきた環境に適応したチャイルド・キットが簡単にできるんじゃないかな。記憶の移植で歌を教え込んだとすれば、文化継承の問題よりも深い問題になる」
「スワンプマン問題か。記憶を移植しても無理だよ。本人の知識は得られん。まして同じふるまいは不可能だ。記憶は一冊の本に書き込むのではない、複数の本にバラバラに書き込んでいるんだよ。まして忘れる、つまり書き込んだ内容が欠けてしまい、本人でも読めないケースがある。だから1冊だけを取り出して移植しても何も無い。混乱を引き起こすだけだ」

「なら歌を教え込んだのは本人が努力してプログラムした産物で、他人の記憶を移植したのではない。と確定できるかな」
トーマスはうなづいた。「出来るならとっくにサービスとしてやるとるよ。死んだ人間を再生できるとしてな」

ヨシユアは笑った。「ありがとう、貴重な意見に感謝する」端末をつついた。「尋問は終わりだ。二人を編集室から出す。荷物をロビー前で全部用意しろ、全部返すんだぞ。でなければ警察の信頼に関わる」

『了解しました』
ヨシユアは席を立った。「バトカーで話した通り、俺は適正捜査にかかるから見送りはできん」チャイルド・キットに目をやった。『お前が送ってやれ』
『了解しました』チャイルド・キットはドアに向かった。『どうぞ』

ナイアスとトーマスはドアに向かい、編集室から出ていった。廊下を通る。
「すみません」ロビーに来る前に警察官から声がかかった。「トーマス・シンとナイアス・シンですね」

ナイアスはうなづいた。「はい」
「押収した品を渡します」警察官は部屋に案内した。

トーマスとナイアスは警察官に続き、部屋に入った。机が置いてあり、押収した荷物が丁寧に置いてある。荷物を身につけた。
「受け取り終わりましたら、勝手に外に出て下さい。ご協力感謝します」警察官は頭を下げた。

トーマスとナイアスは一通りの装備を終えると部屋から出た。
警察署を出た先の光景は、超高層ビル街で車通りが激しかった。

ナイアスはカードを手に取り、操作した。立体地図とともに現在位置が映る。クラウド・シティの中央部だと分かった。トーマスに受け取ったカードを見せた。「今持っているカードをアルフおじさんに届ければ良いんだね」カードを回した。「アルバムだったら、別にストレージの中に入れていても良いんじゃないか。プライバシーがうるさいって言うけど、実際に漏れたなんて聞いた試しはないよ」

「アルバムだけならな。奴の注文に合わせて特別に最適化しているんだ。下手に漏れると厄介なんだよ」
ナイアスは曖昧にうなづいた。「厄介って、特殊なコーティングでもしているの」

「近いな」
ナイアスはカードに映る項目を見た。項目は難解な文字が書き込んである。「子供の名前がクライスっていうのか。雇っているメイドの名前も同じだったな」

「メイドを雇ったのか。チャイルド・キットはいなかったか」
「見かけなかったな」

トーマスは手持ちのカードを操作した。タクシーを呼ぶ為のウィンドウが展開した。操作を続けて現在位置を送信する「チャイルド・キットを使つたらんとは、何の為にカードを届けるのか分からんな」

ナイアスはトーマスの言葉に眉をひそめた。チャイルド・キットを使うのと、カードを届ける意味とは繋がりが見えない。「何で困るんだ」
「相手の事情によるとしか答えが出ない」

ナイアスはトーマスのそっけない返答に顔をしかめた。アルフの状況といえば、自分の子供と同名のメイドを雇っていて、外に出てはいけないと命令していた。脳裏に状況を浮かべた時、ふとカードを見た。記憶を届けるだけなら解析し、最適化する意味はない。アルバムをそのまま持っていけばいいからだ。何故特殊な処理をするのか。徐々に仮説が浮かんでくる。初期型は見た目が人と区別が付かないが、瞳を見た時に女性のチャイルド・キットと同じ奥に機械が埋め込んでいるのが見えた。「まさか」小さくつぶやいた。トーマスは記憶は断片になっていて、埋め込んでも意味がないと言っていた。裏を返せば、断片を埋め合わせれば移植は可能だと意見している。徐々に血の気が引いていった。

タクシーが来て、トーマスの前で止まった。

「頼んだぞ」トーマスはナイアスの肩をたたき、タクシーに乗り込んだ。タクシーのドアが閉まり、走り出した。

ナイアスは自身から離れていくタクシーを見た。トーマスがアルフに何を届けるのか、アルフは届けたカードを何に使うのかを察した。